

# 関東大震災の火災による死者は約9万2000人

## 秋葉原付近では地域ぐるみの消火活動で延焼を阻止。

# 防災の年

関東大震災から  
100年



大切なものを  
守るために備えよう！



▲関東大震災後の万世橋、神田須田町付近の惨状  
(写真提供：東京都立図書館)

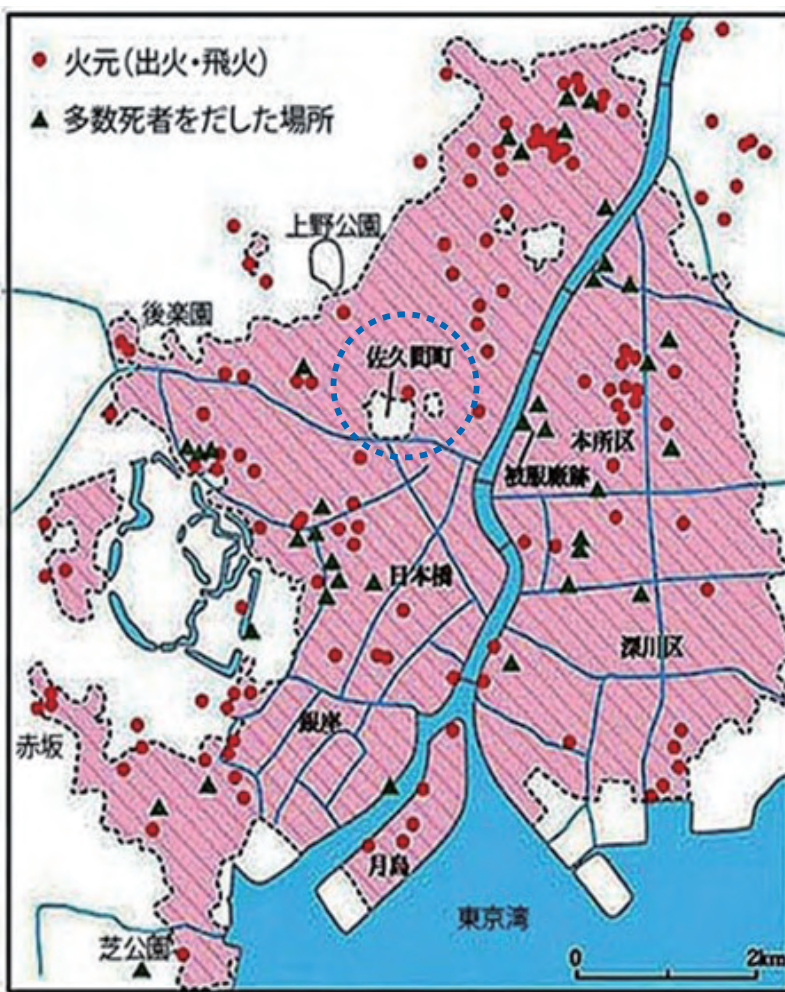
関東大震災では、各地に発生した火災で大きな被害が生じました。約10万3000人の死者(その内火災によるものが約9万2000人)という悲劇となったのです。

中でも、隅田川沿いにあった「旧陸軍被服廠跡」(現在の東京都立横網公園)では、家財を持って避難した約4万人の避難者のうち、約3万8000人が四方からの炎に囲まれて焼死しました。しかし、この地から約2km西側の、秋葉原に近い神田佐久間町と神田和泉町付近では、住民たちの必死の消火努力もあり、延焼を阻止しました。

## 延焼防止に貢献した多くのこと

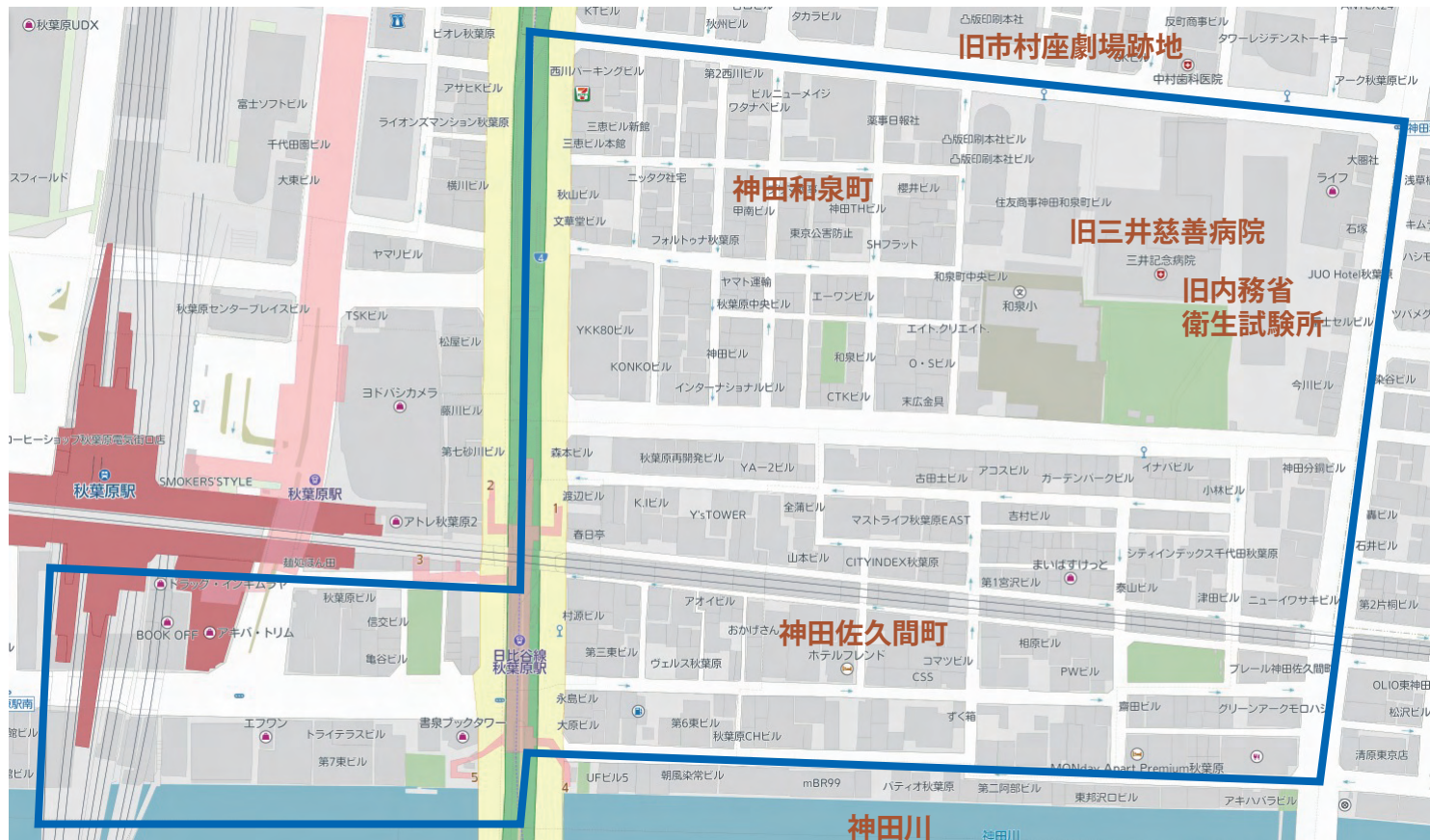
巨大地震の発生により、電話が不通、道路は損壊や避難する人々で混乱し、消防車の移動もままならない状況でした。またいたるところで水道管が壊れ通水不能、消火栓の多くは断水で消火には使えない状態でした。このような状況でしたが、周囲がことごとく消失したにもかかわらず、現在の秋葉原駅(当時は万世橋駅)の東側の神田佐久間町、神田和泉町にあった1630戸の町は焼け残りしました(右図の「佐久間町」の部分)。それにはいくつかの理由があります。

- 江戸時代には、数回の大火の火元となった地域だったので、住民の防火意識が強く、他の町より多くの消火のための**天水桶**が設置されていた。
- 現在の消防団のような「**消防組**」があり、毎晩の見回り、消火訓練も実施していたのでポンプの扱いにも慣れていた。
- 地震発生後は、地域の長老たちがリーダーとなり、「桶やバケツをもって集まるように」と住民に声を掛け、**バケツリレー方式**で消火活動を行った。
- 和泉町ではポンプ所の貯水池の水で消火活動、佐久間町では南側の神田川の水を消火に利用できた。
- 近隣に帝国嚮筒(ぼんぷ)というポンプメーカーがあり、目黒消防署に納入前のポンプを借りることができた。また、三井慈善病院(現在の三井記念病院)の自衛用消防ポンプも活用できた。



関東大震災に夜東京市の火災(震災予防調査会、1925)

## 火災を食い止めた「地の利」



また見逃せないのが、この地域の市街地の構造が延焼防止に効果を発揮するものだったことです。上の地図の青線で囲んだ部分が延焼を阻止した神田佐久間町、神田和泉町ですが、北東部には、耐火構造の内務省衛生試験所、三井慈善病院、北側にはミツワ化学試験所、市村座劇場や郵便局などのレンガ構造の建物群があり、それぞれが防火壁の役割を果たし延焼を防ぎました。また南側には神田川が流れ、消火のための消火水として利用できただけでなく、防火帯の役割を果たしました。

更に西側には秋葉原貨物駅、その構内に神田川に通じるドックが設置され、木造密集市街地と接していなかったため、延焼防止に寄与する好条件が揃っていたのです。

9月1日の正午過ぎから3日の朝まで周囲の火災が続きました。多くの焼死者を出した旧陸軍被服廠跡の避難者は、四方を火に囲まれ逃げ場を失っていましたが、この地域では風向きが時間帯により変化し、一気に四方から火が迫ることがなかったという幸運もありました。

神田佐久間町、神田和泉町地域の状況を時系列的に説明すると次のようになります。

- <9月1日18時> 火の手は南側から迫ったが、神田川と電车道が延焼を防いだ。
- <9月2日深夜0時> 西側から火が迫ったが、上記秋葉原貨物駅のドックの水を使って消火活動。
- <9月2日6時> 東側から迫ってきた火勢には、耐火建物が効果を発揮。
- <9月2日15時> 北側からも火が迫ったが、レンガの建物群が防火壁の役割を果たした。

このように、延焼防止に役立った町の構造という「地の利」に加え、地域一帯となった消火活動が奇蹟的に火の手を食い止めたのです。